

インド地誌

大 友 篤

私は、所属する大学の教育学部で人口地理学と外国地誌を兼担している。後者の外国地誌では、例年、インド地誌を講義している。現地の事情にある程度通じているという点では、インドばかりでなく、タイ、メキシコ、スリ・ランカなどいろいろな国々をあげることができ、毎年、開講にあたって、どの国にするか迷うのだが、結局、インドに落ち着いてしまうのである。その第一の理由はある。毎年、講義ノートを変えずにすむという点にある。発展途上国の場合、統計資料は、調査やデータ収集が終わってから、発表になるまで多くの年月を要し、しかも、それらの調査の間隔が10年おきといった、かなり長期的なものになるので、ある年次についての統計資料をかなり長期間にわたって使用せざるを得ないことが多い。インドは、まさにその典型的な国であり、したがって、講義ノートの統計数値も、かなり長期にわたって改正する必要がないわけである。しかも、インドの場合、社会経済的变化そのものがきわめて緩やかであり、そのために、そのような古い資料であっても有用性を保持しているのである。

日本では、十年一昔というが、インドでは、十年や二十年は決して昔ではないのである。私は、1960年代の半ばに、インドで1年間を過ごし、その後、1970年代の半ばと、1980年代の初め、そして1990年の秋に、それぞれ、インドを訪れたことがあるが、その度ごとにインドはさっぱり変わらないという印象を受けた。同じアジアのタイには、毎年のように出かけるが、その度ごとに何かしらの変化に気が付く。

とくに、インドで変化があまり認められないのは、都市のCBDと農村である。1970年代にニューデリーのCBDで見たある文房具店のショーウィンドウの飾り付けは、1960年代に訪問した時とまったく変わっていないのにおどろかされたし、1970年代にボンベイの大きな書店で見た1800年代に出版された本が、1980年代に訪れた時もそのま

ま書棚に納まっていた。農村では、古来からの農法が現代でも生き続けており、大げさな言い方ではあるが、インドの時代を超えた悠久性を実感する。

このように、インドの場合、社会経済的变化が小さいことから、講義ノートをあまりつくりかえる必要がないという安易な理由で、インド地誌をとりあげているのであるが、さらにもう一つの理由がある。それは、インドの多様性である。自然環境ばかりでなく、社会、文化、経済にわたる多様性である。雨季と乾季の明瞭な区別、緯度の違いによる植生の違い、多岐にわたる人種構成、州によって異なる公用語をもつということで象徴される多種類の言語、ヒンズー教ばかりでなく、イスラム教、ジャイナ教、シーク教などの多種類の宗教、制度的には廃止されたといえ、その名残りをとどめているカースト社会が生み出している多岐な社会階層など、他の国々と比較すると、いろいろな分野においてきわめて多様性に富んでいるという点である。このインドの多様性は、たとえば、東南アジア全域やラテン・アメリカ全域を対象にした場合よりも、もっと大きいと思う。このような多様性は、ほかの地域に比較して、より多く学生の興味をひき、したがって、講義のしがいがあるからである。

ところで、このような地誌の講義の準備のために、いわゆる地域研究 (Area Studies) と呼ばれる分野の論文を読む機会が増えてくるのだが、気になるのは、この分野の人たちの多くが地理学の出身ではなく、しかも地理学ばかりでなく地誌学そのものの存在をほとんど無視していることが多いということである。このような現状を考えると、地理学の内部において、現代の地理学の体系における地誌学の位置づけとか、研究上の視点などについて、もっと論議し、これらを外部に明確に示すべき時期がきていると思うのである。